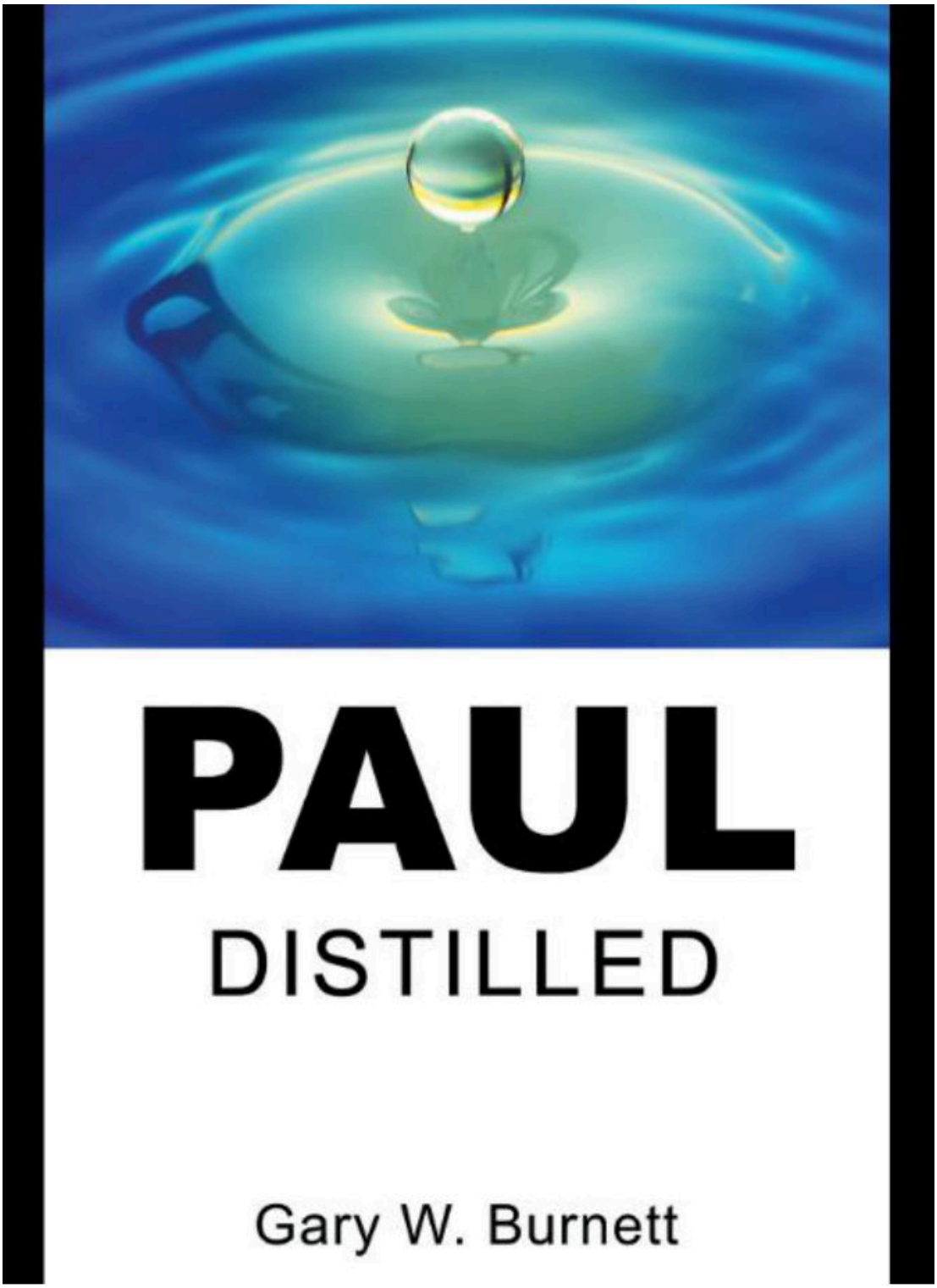
Paul Distilled by Gary W. Burnett

ゲイリー・W・バーネット（Gary W. Burnett）· ドイツ語訳：Hans-Jörg Ronsdorf · 2022年4月 · 2026年10月改訂

『パウロ――そのエッセンス』（その働きとメッセージの要約）

ゲイリー・W・バーネット（Gary W. Burnett）は、ベルファストで神学の教授を務めていました。



ここで彼は自分の本を紹介しています。

Paul Distilled by Gary W Burnett - YouTube

ここでは、各章について短く、お勧めできる要約を見ることができます。 Fitzroy Sunday Nights - YouTube

序論

第1章　世界を変える神の愛

第2章　愛は動詞である

第3章　福音

第4章　十字架につけられた神

第5章　復活はすでに始まった

第6章　いのちを与える御霊

第7章　イエス、世界の唯一のまことの主

第8章　世界の中で神の義となる

第9章　徹底した平和の追求

第10章　貧しい人々を忘れないように

第11章　恐れに対する解毒剤

第12章　パウロと、指導者としての女性たち

第13章　ともに世界を変える

第14章　すべてを再び家に連れ帰る

パウロと、指導者としての女性たち

1世紀の女性たち

パウロにとって、メシアであるイエスについての良い知らせがすべての人のためのものであることは、きわめて重要なことでした。神の賜物であるいのち、新しい創造は、分け隔てのないものであり、人間のあらゆる壁を打ち破るものでした。パウロの世界は非常に階層的であり、イエスに従う者たちの共同体を設立したとき、彼は、彼らが福音の効果を余すところなく理解するようにしなければなりませんでした。彼は彼らに、キリストにあってすべての人は等しいと語りました。ですから、これらの共同体は、民族的な所属――ユダヤ人か異邦人か――、社会的・経済的な地位――奴隷か自由人か――、あるいは性別――男か女か――に基づく区別を、もはや容認することができなかったのです。パウロの世界では、彼の故郷であるユダヤ教においても、また1世紀のヘレニズム文化全般においても、女性は二級市民でした。女性蔑視は広く行き渡っていました。劇作家や哲学者たちは、女性をあからさまにけなしました。エウリピデスは女性を「この破滅の被造物」と呼び、アリストテレスは女性を「不具の男性」と見なしました。確かにいくつかの例外はありましたが、一般に女性は夫の所有物として扱われ、正式な教育を受けず、全体として一人前の人格として扱われていませんでした。

ユダヤ教の伝統において、女性は一般に低く評価されていました。1世紀のユダヤ人歴史家ヨセフス（Josephus）は、女性は「あらゆる点で男性に劣る」と言い、ユダヤ人哲学者フィロン（Philo）は、女性は「生まれつき不完全で堕落しており」、非理性的で、「名誉において男性と等しくない」と考えました。紀元前2世紀のシラ書は「女性は恥をもたらす」と言い、『ルベンの遺

訓』はあからさまに「女性は悪である」と述べています。この時代のユダヤ教の会堂では、女性はただ聞くことしか求められず、話すことは許されていませんでした。彼女たちは集会の正式な参加者とは見なされていなかったのです。それは男性の世界でした。

パウロと女性たち

今日、パウロは女性に関して、彼が生きていた文化とそれほど違わなかったという印象を持たれることがよくあります。パウロの女性観は単にまったく時代遅れであり、男性と女性が同権であることを私たちみなが知っている現代世界には、もはや関係がないと考える人もいます。パウロのことは忘れなければならない、彼は単に性差別主義者であり、ひょっとすると女性嫌いでさえある、というのです。また別の人々にとっては、パウロは、男性だけが教会で教師や指導者になるべきだという証拠として引き合いに出されます。いくつもの教派全体が、今日でもなお女性を指導から締め出しています。ある人々にとって、男性と女性は補い合うだけで等しい価値を持つものではなく、結婚においても教会においても権威を持つべきなのは男性なのです。しかし、パウロについてのこの二つの理解はどちらも、私たちが彼の手紙の中で読むことを誤って解釈しており、1世紀の世界を誤解しています。パウロの手紙を注意深く読むなら、私たちはまったく別の結論に導かれるのです。パウロにとって、女性と男性は互いに依存し合っており（コリント第一11:11）、互いに従わなければならず（エペソ5:21）、結婚の中での性的な関係においては同等の権利を持っています（コリント第一7:3）。パウロにとって、御霊のすべての賜物は性別にかかわりなく、すべての人に開かれており、女性も男性も、だれもが御霊の賜物、とりわけ預言を熱心に求めるべきでした。イエスに従うすべての者は、女性も男性も、等しく「キリストにあって」おり、キリストのかたちへと変えられていったのです（コリント第二3:18）。

さらに、パウロが女性を奉仕における指導者として受け入れていたことは明らかです。彼にとって、女性は男性と同じように信頼できるパートナーであり、同等の存在でした。彼は女性たちを「同労者」、「福音のために私とともに戦った人たち」、「真の仲間」と呼んでいます。パウロがこれらの呼び名を女性に用いていること、さらに「執事」、「指導者」、「キリスト・イエスにある同労者」、そしてこれから見るように「使徒」という呼び名さえも用いていることを見るとき、パウロについての一つの像が浮かび上がってきます。それは、彼が生きていた世界とも、また今日しばしば彼が描かれる仕方とも、際立った対照をなす像です。教会における女性の役割を押し戻そうとする人々は、ふつうコリント人への手紙第一とテモテへの手紙第一にある二つの節を指し示します。これらの節に目を留めることは確かに大切ですが、パウロについて考えるとき、それらは本当は正しい出発点ではありません。

旧約聖書とイエス

パウロがユダヤ人であり、自分たちのユダヤの聖書をよく知っていたことを思い起こすのは大切です。その聖書の中には、すばらしい女性の指導者たちが登場します。イスラエルの預言者的な指導者であり音楽の指導者であったミリアム、士師の時代に自分の国を大きな成功のうちに導いたもう一人の女預言者デボラ、そしてヨシヤ王がすべての男性の預言者よりも優先したフルダです。彼女たちのだれ一人として、またイスラエルの王冠を戴いた女王たちのだれ一人として、女性

であるからという理由で、その指導的役割を批判されたことはありませんでした。さらに、イザヤ書40章9節には、ヤハウェの王国の到来という良い知らせを告げる女性の伝道者がいます。ヘブル語ではここの説教者が明らかに女性として示されていますが、そのことは私たちのドイツ語訳聖書の大半では失われています。詩篇68篇11節では、ほかの女性の説教者たちが前面に出ています。「主はみことばを告げられる。それを告げ知らせる女たちは大きな群れ。」そしてもちろん、神が御霊を注ぎ、その結果「あなたがたの娘たちと息子たちは預言する」という預言者ヨエルの預言を忘れてはなりません。周知のとおり、これはペテロが五旬節の説教で群衆に何が起こっているのかを説明したときに取り上げたものです。さらに、詩篇、イザヤ書、ホセア書、申命記が、神を母として描いていることもあります。同時代の人々が女性を否定的に評価していたにもかかわらず、パウロは自分の聖書を知っており、自分が受け継いだ遺産である、女性の指導者、預言者、説教者の力強い伝統を十分に意識していたのです。

そして彼は、自分の世代からもその後の世代からも大いに尊敬されたガマリエル（Gamaliel）から教えを受けました。私たちが知るかぎり、ガマリエルは、女性について非常に低い見方をしていたパリサイ派ユダヤ教のほかのラビたちとは違っていました。ミシュナに伝えられている彼の言葉の中で、ガマリエルは女性を肯定し、男性と同等に扱い、女性の幸せを後押しし、決して女性をけなすようなことを言っていません。それは、すでに見たように、まさに女性蔑視的であったほかのラビの教師たちとはまったく対照的です。パウロの目の前にはまた、イエスの模範がありました。イエスは、当時のほかの教師たちとは違って、女性たちがご自分の足もとに座って学ぶことを許されました。イエスは女性の弟子たちを歓迎し、井戸のそばのサマリアの女のような女性たちとの出会い――そこでイエスはいくつもの社会的慣習を破られました――は、イエスが女性たちを積極的に受け入れておられたことを証ししています。イエスのいやしの御手に触れられた女性たちは数えきれず、その中には、儀式的に汚れていると見なされていた多くの女性たちもいました。さらに、イエスは復活の後、最初にマグダラのマリアに現れ、当時一般的に支配していた文化に反して、ご自分が女性の証言を尊重しておられることを示されました。そして福音書の著者たちは、法廷では女性の言葉は一般に認められなかったにもかかわらず、女性たちを復活の最初の証人として挙げることをためらいませんでした。

これらすべてが、パウロの女性についての考え方に影響を与えたことは疑いありません。使徒の働きと彼の手紙の中で私たちがパウロについて読むことは、女性を肯定する点において、文化に逆らう、徹底したパウロの姿を明らかにしています。パウロにとって、男性と女性は等しくキリストにあって贖われ、キリストのからだにおいて一つであり、等しく神の王国の祭司であり、御霊は等しく彼らの上に注がれており、両者ともに互いに、また世界に対して、謙遜に愛をもって仕えるべきでした。彼の神学の基本的な特徴は、教会における女性と男性の平等について多くのことを物語っています。そしてテサロニケ人への手紙第一2章7節を考えてみてください。そこでパウロは自分自身を、子に乳を飲ませる母として描いています。もしパウロが、自分のもろい男性のエゴを守ろうとする典型的な男性優越主義者であったなら、こんなことは予想できないでしょう！

ローマ人への手紙16章から始めましょう

指導的な立場にある女性についてパウロがどう考えていたかを知るためには、彼の偉大なローマ人への手紙から始めなければなりません。そして16章を開かなければなりません。私たちの大半は、この章をざっと読み飛ばしてきたのではないかと思います。パウロがあいさつを送っている人々の名前が並んでいるだけのように見えるからです。しかし、これは実はとても興味深い章です。パウロはまだ一度もローマに行ったことがありませんでした。スペインへの宣教計画のためにローマの人々の支援を得ようとしているこの手紙の中で、彼はローマの家の教会の指導者たちに丁寧にあいさつを送っています。ローマの教会は一つの大きな教会ではなく、人々の家で集まる小さなグループの集まりでした。しばしば窮屈な賃貸住宅で集まっていたのです。16章の名前から、私たちは多くのことを読み取ることができます。奴隷の名前もあれば、ユダヤ人の名前も、異邦人の名前もあります。そしてそのうちのいくつかは女性の名前です。プリスカ、ツルパイナ、ツルポサ、マリア、ペルシス、ユリアといった人々です。みな、ローマの信者たちの小さな教会の指導者、あるいは共同指導者です。実際、パウロがここでキリスト者としての働きをたたえている同労者の3分の2以上は女性です。しかし、特に際立っている女性が三人います。

フィベ

第一に、フィベです。パウロは彼女について、ケンクレアの教会の奉仕者、あるいは執事であると言っています。いくつかの翻訳は「女性執事」という訳語を選んでいますが、ギリシア語にはそのような語はありません。パウロがこの語をほかの箇所でどのように用いているかを見るなら、フィベが、パウロがこの手紙を書いたときにいたコリントの教会の指導者であることに、本当に疑いの余地はありえません。パウロが1節と2節で用いている言葉づかいと語句を詳しく見るなら、この時代の手紙について私たちが知っているすべてのことからして、フィベはある程度の地位を持つ人物であり、コリントの教会の指導者であって、パウロのきわめて重要な手紙をローマに届けることを任されていたのです。

当時は、手紙を届ける人がそれを読み上げ、受け取った人々にそれを解き明かすのが普通でした。興味深いと思いませんか。パウロにとって、ローマ人への手紙はきわめて重要なものでした。彼はローマに行ったことがありませんでしたが、帝国の西部に良い知らせを届けるために、そこのキリスト者たちの支援を得たいと願っていました。ですから彼は、自分の福音理解を説明することにとても注意深いのです。彼はだれに自分の手紙を託すのでしょうか。それをローマに届けるこの指導的な女性、フィベです。話はさらに興味深くなります。なぜなら、フィベはローマに着いたとき、当時の普通のやり方に従って、さまざまな家の教会を回って手紙を読み上げ（読み書きの難しさのために、人々は手紙を読むというよりも、むしろ聞いたのだということを考えてください)、それからグループの人々とともに座って、パウロが何を言おうとしているのかを彼らが理解できるようにしたと思われるからです。

コリントでパウロがフィベとともに座り、彼女と一緒に手紙を一通り見ながら、それをどのように読んでほしいか、何を強調したいか、そしてどの部分はおそらく説明が必要かを彼女に話している様子を、私たちは想像することができるでしょう。ですから、フィベ――使徒から、ローマ人

への手紙を説明し教えることを託された教会の指導者――は、女性の指導者や教師についてパウロから聞かされてきたこととは、まったく合わないのです。

プリスカ

プリスカ、あるいはルカが使徒の働きの中で呼んでいるようにプリスキラは、パウロがその夫アキラとともに福音のために働いた人でした。プリスカは6回言及されるうち4回、夫より先に名前が挙げられています。これはギリシアやヘブルの文化では珍しいことであり、この夫婦の奉仕において彼女が果たしていた重要な、ひょっとするとさらに重要な役割を示していました。二人とも――もちろんプリスカも含めて――、ルカによって、イエスの最初の弟子たちの間で重要な人物となったアポロの教師として特に取り上げられています。ですから私たちは、すでに使徒の働きから、プリスカが教会の指導者であり、男性たちを教える教師であったことを知っているのです。パウロがローマ人への手紙を書いた頃、二人はローマに住み、家の教会を指導していました。パウロは二人に心からのあいさつを送っていますが、ここでもプリスカの名前を先に挙げています。

ユニア

しかし、さらに7節に登場するユニアがいます。「私の同胞で私と一緒に投獄されたアンドロニコとユニアによろしく。彼らは使徒たちの間でよく知られている人たちで、私より先にキリストにある者となりました。」古いNew International Versionといくつかの翻訳は、ここの名前をユニアスとしており、男性であることを示唆していますが、この名前はユニア、すなわち奴隷や解放された女性に与えられたラテン語の女性名です。当時の文献には、この女性名の例はたくさんありますが、ユニアスという男性名の例は一つもありません。喜ばしいことに、この名前の意味についての論争はもはやなく、新しいNew International Versionでは今ではユニアとなっています。ユニアは女性であり、おそらくアンドロニコの妻でした。過去にユニアを男性にしようとする試みがなされた理由は、それに続く言葉、すなわちこの夫婦が「使徒たちの間でよく知られていた」とパウロが言っている言葉にあります。男性が支配する教会において、女性が使徒でありうるという考えは収まりが悪かったのです。歴史を見ると、驚くべきことに、男性の学者たちは、明らかな女性名を男性名、すなわちユニアスにするために、ギリシア語を文字どおり書き換えてしまいました。この歴史について少し知っておくことは価値があります。

聖書学者たちは、ギリシア語新約聖書の校訂本文を用います。これは、何千もの古代の写本を検討した結果、もっとも原文に近いと考えられる版です。宗教改革から1927年のネストレによるギリシア語新約聖書の版に至るまで、ギリシア語新約聖書の校訂本文では、ローマ人への手紙16章のユニアは女性でした。ところがその後、ネストレはこの名前は男性形でなければならないと判断し、こうして突然「ユニアス」が現れ、ユニアは脚注に追いやられました。50年後には、学者たちによって編集されたギリシア語本文は、その脚注さえも削ってしまいました。1990年代になってようやく訂正がなされ、初期のギリシア語写本と学者たちがみな知っていたことが明らかにされました。ユニアは女性だったのです。

しかし、今日ではだれもがこの点で一致しているにもかかわらず、パウロがこの節で実際に言っていること――女性であるユニアが使徒であったということ――をあまりにも居心地悪く感じた人々がいて、彼らは「使徒たちの間で際立っている」を「使徒たちによく知られている」に変えようとしました。たとえばEnglish Standard Versionがそうです。

しかし、ギリシア語を話し、語をどう訳すべきかを非常によく知っていた初期の教父たちにとっては、「使徒たちの間でよく知られている」というのがこの文の意味だったのです！

4世紀のクリュソストモス（Chrysostomos）は、次のように語っています。

> 使徒であるだけでもすばらしいことです。しかし、その中でさえ際立っているとは――これがどれほどすばらしい賛辞であるか、考えてみなさい。栄誉を受けるべき人に栄誉を！　使徒という称号を帯びるにふさわしいとさえ認められたこの女性の知恵は、どれほど大きなものだったことでしょう。

ユニアは女性であり、使徒でした。パウロの時代の教会において、よく知られた指導者だったのです。

ですから、もしそうであるなら、フィベ、プリスカ、そしてローマ人への手紙16章のほかの女性の教会指導者たちとあわせて考えると、結論は避けられません。最初のキリスト者のグループにおいて、女性たちは男性たちと同じように、指導と教えにおいて完全な役割を果たしていたのです。**そうである以上、一見するとローマ人への手紙16章と矛盾するように思えるほかのすべてのテキストは、このテキストの光のもとで考えられなければなりません。**使徒の働きの証言とともに、ここが出発点とするにふさわしい場所なのです。

ほかのテキスト

すでに触れたコリント人への手紙第一とテモテへの手紙第一の二つのテキストは、そうなると例外的なものに見えてきます。そして、これらの節の背景については多くのことを語ることができ、それを知れば、パウロがここで言っていることを普遍的に有効なものだと宣言することは控えるようになるでしょう。**聖書を信じるキリスト者が、新約聖書のほかの部分の力強い証言を考慮せずに、わずか二つの節だけに基づいて神学的な見解を形づくるのは、異例のことでしょう。しかし残念なことに、まさにそれが起こってしまったのです。**

もっと詳しく取り組みたい方には、この二つのテキストについてのもっとも詳細な研究が、フィリップ・ペイン（Philip Payne）の本 Man and Woman, One in Christ の中にあります。簡単に言えば、ペインはテキストの綿密な研究によって、テモテへの手紙第一2章8～15節は、エペソの女性たちの一部に強い影響を与えていた誤った教えに対抗しようとするパウロの意図に照らして読まなければならない、という結論に達しています。その女性たちがこの教えを広める活動は、抑えられなければなりませんでした。この箇所のどこにも、「女性が教えることや男性に対して権威を行使することを一般的に禁止すること」を支持するものはなく、また「女性は生まれつき、霊的な事柄やその他の事柄において、教えることや男性に対して権威を行使することに適していな

い」という見解を支持するものもありません。同様に、彼によれば、「パウロはこの特定の禁止を、すべての教会とすべての時代に一般化してはいない」のです。

コリント人への手紙第一14章34〜35節についての彼の研究はさらに綿密であり、彼はほかの保守的な学者たちとともに、初期のギリシア語写本に見られる証拠に基づいて、これらの節はおそらくほかの写字生（筆写者）による挿入であり、おそらくパウロのもともとの手紙の一部ではなかった、という結論に達しています。

ですから、この二つのテキストを規範的なものと見なしたり、教会における教師や指導者としての女性についてパウロが考えていたことを何らかの形で代表するものと見なしたりしないことには、非常に十分な理由があるのです。

指導における女性たち

教会における女性について、また家族関係についてパウロがどう考えていたかについて、より包括的な像を得ようとするなら、パウロの手紙の中にはほかにも検討しなければならない箇所があります。私たちがここで意図したのは、ただ、教会の中で支配的であった男性中心の見方、すなわち、奉仕、教え、指導における女性についてパウロが言わなければならないことをゆがめてきた見方を正すことでした。このテーマについてパウロが言っていることすべてを読む際には、ローマ人への手紙16章の箇所に必ず注意を払わなければなりません。また、コリント人への手紙第一11章に注意を払うことも大切です。そこでパウロは、女性が教会で公に預言してよいことを前提としているのです。

パウロは不当に悪い評判を負わされてきたように思えてきます。何世紀にもわたって女性たちがひどく不利な立場に置かれてきたこと、そしてキリスト教会は、女性がキリスト教の奉仕への召命に従うことを許さなかったことによって、多くのものを失ってきたように思えてきます。

それは教会の歴史における汚点です。すべてのキリスト教会、教派、グループが、女性たちが神の恵みとみことばと魂への配慮（牧会）に仕える者としての役割を十分に果たす機会を得られるようにすることは、とうの昔になされるべきことでした。

私たちはパウロのことばを真剣に受け止めなければなりません。彼にとっては、奴隷も自由人もなく、ユダヤ人もギリシア人もなく、男も女もありません。私たちはみな、キリストにあって一つなのです。男と女の区別は、パウロがここで挙げているほかの二つの区分とともに、キリストのからだにおいては取り除かれています。

これは単に、女性と男性の神の前での霊的な立場が同じであるという事実についての注釈ではありません。ガラテヤ人への手紙3章28節にあるパウロの「あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです」は、キリスト者の共同体の社会的な現実に影響を及ぼします。コロサイ人への手紙3章11節の並行する節では、その前後の節から、パウロがこの種の分裂を乗り越えることを、教会の共同体生活への実際的な影響として見ていることが明らかになります。

そしてこのことは、私たちがこれまで考えてきた福音の大きなテーマへと、私たちを連れ戻します。イエスにおいて、神はご自分の世界を救い、新しくするために、そして私たちを完全な人間に

するために来られました。それは、私たちの間に社会的な違いも、階級やカーストの違いもないことを意味します。民族的な分離や人種的な分離もありえません。キリストによって贖われた私たち一人ひとりは、神が召してくださったとおりに神を愛し、神に仕えることが自由にできるからです。そして、まったく同じことが女性と男性にも当てはまるのです。

パウロは、女性をおとしめ、女性を差別し、教会ではあれこれのことをしてはならないと言うようなあらゆる姿勢に、断固として反対するでしょう。それはまさに古い秩序の一部です。新しい創造があるのです。

神が私たちに恵みと力を与えてくださるとき、私たちは女も男もともに、謙遜に主キリストに仕えるのです。

振り返り

あなたが関わってきた教会で、女性がどのように扱われてきたかについて、あなたはどのような経験をしてこられましたか。ローマ人への手紙16章のユニアの物語に驚かれましたか。パウロがユニアを使徒の中に数えていることには、どのような意味がありますか。**使徒の働きとローマ人への手紙16章に、指導的な職務にある女性について書かれていることは、コリント人への手紙第一14章とテモテへの手紙第一2章のテキストよりも大きな影響力を持つべきだと思われますか。**

教会は、指導における女性と男性のバランスをどのように回復することができるでしょうか。

Burnett, Gary W.. Paul Distilled, Wipf & Stock. Kindle版.

ドイツ語訳：Hans-Jörg Ronsdorf（著者の厚意ある許可を得て、次のサイトを利用）
www.deepl.com

2022年4月22日